

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00327

研究課題名（和文）小倉小笠原藩「笠家文庫」に関する復元的研究

研究課題名（英文）Research to restore the contents of the Ogasawara Bunko

研究代表者

渡瀬 淳子（Watase, Junko）

北九州市立大学・文学部・教授

研究者番号：90708637

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：現在残されている小笠原家の蔵書は、系図・家譜などの家の由緒に関わるものと、武家故実・礼法などの家の学問に関するものの二種類に大別できる。しかし、記録の中には、当主の代替わりに際して徳川将軍家へ『古今集』を献上したことが見えるので、文学の本も含めた大部のコレクションがあったと想定した。そしてかつての蔵書を探すのに蔵書印が手がかりになるのではと考え調査を行った。結果、小笠原家には物語や歌書、俳諧書などの文学書、能・狂言、漢籍のコレクションがあったことが判明した。また、蔵書印はよく似た二種類の印があり、使用された時代に違いがありそうだということも分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代の大名が多くの書物を収集していたことは知られているが、それらの蔵書の多くは明治維新後、旧大名家の経済状況が悪化する中で売却され失われてしまった。これらの蔵書のうち、現存するものは蔵書印を頼りにその内容のある程度復元できることが分かったことは、蔵書印の重要性を裏付けるものでもある。また、小笠原家の蔵書印は使用時期によって二種類あることも分かり、江戸後期から明治にかけて押されたものである可能性が高い。このことから、蔵書印によって藩主のコレクションを管理するようになったのが他藩に比べて遅かったことが分かる。今回の研究成果は蔵書印の文化についても新たな問題を提起することになると思われる。

研究成果の概要（英文）：The Ogasawara family's library, which remains today, can be divided into two main categories: those related to the family history, such as genealogy and family history, and those related to the family's academic studies, such as samurai traditions and etiquette. However, since it appears from the records that the family presented "Kokinshu" to the Tokugawa shoguns at the time of the succession of the head of the family, I assumed that there was a large collection that included books on literature as well. I then conducted a search for the scattered books in the collection, hoping that the library stamps would provide clues. As a result, we found that the Ogasawara family had a collection of literary books, including stories, poetry, and Haikai books, as well as Noh and kyogen plays and Chinese classics. I also found that there were two types of library seals that were very similar, and that there seemed to be a difference in the period in which they were used.

研究分野：日本文学

キーワード：大名文庫 小笠原家

1. 研究開始当初の背景

本研究は明星大学前田雅之の主催する科研に関連したものである。申請者は2008年から約10年におよび、以下に挙げる前田氏の科研に参加し、各地の文庫調査を行ってきた。そこで培った方法論や、調査によって得られた知見を応用し、文芸書を中心に小倉小笠原藩の蔵書構築とその傾向、文芸活動の状況について、解明しようとするものである。

申請者は2013年度から4年間、主に臼杵藩の蔵書を調査してきたが、その調査を通して、藩主と近臣たちが一体となって月次の歌会を催し歌集を編纂していたことや、古今集や伊勢物語といった中世以来の古典に加えて、徒然草や百人一首など、中世末期に新たに教養の仲間入りを果たした書物が注釈とともに所蔵・書写されていることを確認した。中でも近臣達と歌集を編纂するという文芸活動のあり方は江戸後期の臼杵藩独自のものであるが、他藩にも、各藩主を中心とした独自の藩の文化があるはずだと考えるようになった。

北九州市小倉は、申請者の本務校の所在地であり、地域の文化振興に責任をもって関与することが求められている。そこで、小倉の文化的背景を調べてみると、小倉藩の置かれた門司・小倉は古来交通の要衝であり、経済活動とともに文化活動も盛んであった。特に初期の藩主小笠原忠真は連歌師西山宗因を小倉城に招いて千句連歌を行うなど、文芸に造形が深かった。しかし幕末の長州藩との戦いの際、自ら城に火を放ち支藩のあった豊津へ逃げたため、小倉城にあった藩校の蔵書は、一部が下関に、残りがみやこ町の歴史資料館に寄託されている。藩主の蔵書は主に北九州市内の博物館に所蔵されているが、他にも一部が内閣文庫に所蔵されるなど、かつての藩の蔵書は各地に分散されている。以前、北九州市内の文書については九州大学で小笠原文書の調査が行われ目録が作られたが、現在では非公開とされ、情報が活用出来ない状態になっている。こうした状態のなか、藩主の文芸活動という切り口で分散された書物を横断的に調査することによって、小笠原藩の文化的特徴をあぶりだすことができるのではないかと、その研究成果は地域の文化振興にも還元できるのではないかと考えるようになった。

また、近世大名の蔵書構築を調査することは、中世から近世にかけていわゆる古典を中心とした「教養」がどのように変化し受け継がれていったかという、申請者自身の中心テーマとも深く関連している。申請者は一貫して中世の物語の根底にあるコンテクストを解明するべく研究を進めてきたが、そのコンテクストの主要な部分は時代ごとの「教養」と深く結びついている。特に中心的に研究を進めてきた室町時代から近世初期にかけての時期は、中古以来の古今集や伊勢物語、源氏物語を中心とした古典的教養世界とは別に、能や連歌や古典注釈活動によって培われた新たな教養が生まれ広がっていく時期である。この中世由来の新たな教養が、近世大名家の中にどのような形で定着していくのか、それとも影響はないのか、文芸の蔵書家としては無名の大名家であるからこそ、小笠原藩の蔵書をみることで、必須教養として生き残った中世文化の一例が分かるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、小倉藩主小笠原氏の蔵書を、文芸書を中心に調査し、書誌情報を整理・蓄積すること、他大名家の蔵書と比較検討を行い、小笠原藩蔵書の性格を明らかにすること、の二つを目的としている。

小笠原氏は武家礼法や弓馬術の家として知られており、小笠原流礼法や弓馬術関係の蔵書については展示や研究が行われているが、その文芸活動に関してはほとんど関心が払われてこなかった。東大史料編纂所によって小笠原文書の調査も行われているが、歴史史料としての調査であり、個々の蔵書の内容については取り上げられることがなかった。

本研究は、今まで顧みられることのなかった小笠原家の文芸活動を解明し、成果を地域に還元するという点が独自のものである。

3. 研究の方法

本研究では、市内の北九州市いのちのたび博物館(旧歴史・自然史博物館)に所蔵されている小笠原文書を中心に、主に文芸活動に関連するものを取りあげ、どのような分野(漢籍、史書、歌書、物語、説話、軍記物、軍書・軍談など)の蔵書があるか、分野ごとの偏り(多い・少ない)があるか、どの藩主の時代に蒐集されたものか、の三点を中心に調査する。

調査にあたっては、書誌調査のほか写真撮影を行い、可能なものは全冊撮影し、データとして蓄積する。

みやこ町歴史民俗博物館に寄託されている資料については、目録を精査し、調査を行う。その際、藩主の蔵書との関連性も考慮に入れる。

また、その他にも小倉藩主に関連する資料について随時調査を進める。現時点では、小笠原忠真の歌集『老木拙萼集』が内閣文庫に所蔵されていると分かっているので、調査する予定である。

これにより、いつ頃 誰によって どのような関心によって蔵書が集められたのか、を明ら

かにし、それが地域文化の形成とどのように関係しているかを考察する。

4. 研究成果

市内博物館とみやこ町歴史民俗博物館の調査により、小笠原家の蔵書の概要が明らかになった。現在、この2箇所に残されている資料は、概ね、小笠原藩の江戸藩邸、小倉城、藩校、京都・大阪の藩邸にあったものである。市内のいのちのたび博物館の資料は江戸・京都・大阪の藩邸にあったものが中心で、戦後に小笠原家から資料の寄贈があったものである。みやこ町に寄託されたものは小倉藩の藩校であった思永館と小倉城にあった資料である。

みやこ町に資料が寄託されているのは、複雑な経緯がある。幕末の慶応元(1865)年9月に小笠原藩は幕府の長州征伐の命を受け出兵の準備を進めるが、戦闘開始直前に藩主の忠幹が急逝するという悲劇に見舞われた。翌年6月には長州勢の奇襲を受け、7月には門司・小倉を主戦所にした戦闘へと発展した。7月20日に幕府の将軍徳川家茂が没し、月末には長州征伐のために集まっていた諸藩も撤兵してしまった。そうした中、親藩であることもあり、撤兵の判断ができなかった小倉藩は、このまま単独で持ちこたえるのは不可能と判断し、8月1日、自ら城に火を放ち香春郡へ撤退、後に豊津へ移った。こうした混乱の中で城からかうじて持ちだされた文書や典籍が、豊津の藩校を前身とする福岡県立豊津高等学校(現育徳館高校)に伝来し、それがみやこ町に寄託されたのである。

市内のいのちのたび博物館には約400点、みやこ町歴史民俗博物館には1326点の資料が残されている。

これらの蔵書には、明治以降、旧家臣らが寄贈したのものも含まれており、例えばみやこ町歴史民俗博物館蔵の『騎射秘抄』『犬追物磨鏡』(いずれも写本)の奥書には、「明治廿一年十月於東京購之、後世参考ノ為御文庫ニ蔵ス 平井淳磨」とある。この平井淳磨について詳細は分からないのだが、いのちのたび博物館の蔵書にも小さな「平井」の丸印が押されたものがあり、平井氏が小笠原家の家臣であったことは間違いないものと思われる。近代になってからも小笠原家の家業として武家故実や礼法が重んじられていたことや、関連する書籍の収集に旧家臣らが積極的に協力していたことが見えてくる。

2箇所の文庫を調査したことによって、小笠原家の蔵書印が少なくとも2種類あったことも分かった。小笠原家の蔵書印は篆書体で陽刻、長方形の「笠家文庫」印であるが、この印には匡郭が細めの印Aと、匡郭が太めでやや小ぶりの印Bの2種類の異なる印がある。この二つの印はよく似ているが、一見して別の印であることが分かる。北九州市いのちのたび博物館の資料には印Aの押されたものが2点あったが、印Bの押された資料はなく、みやこ町歴史民俗博物館の資料には印Bはあったが印Aはなかった。このことから、印Aの使用された時期は印Bに比べて早く、印Bは豊津(もしくはその前の香春)に移転した後に用いられたものと思われる。

また、押印の傾向も異なり、印Bは『笠系大成』『藩翰譜』『御内書御文言』『今川了俊大双紙并家記抄』などの本にも押されているが、いのちのたび博物館にも所蔵のある『笠系大成』には印は押されておらず、他の本を見てもこうした書物に印は押されていない。みやこ町歴史民俗博物館学芸員の木村氏によると、明治の初期に福岡県史の編纂事業があり、その際に史料の借り上げがあったため、史料の紛失を防ぐために押されたものもあるのではないかということだった。ただ、それが主な理由とも言えないのは、家臣から寄贈された図書に元の蔵書印を切り取って押印しているものも見られるため、例えば『射手具足聞書』では、「松島氏之図書」印を切って「笠家文庫」印を押している。「松島氏之図書」印を切って「笠家文庫」印を押したものは他にも何点か確認できるため、これは所蔵者の変更に伴う処理であって、受け入れの都度行われたものではないだろうか。ただし、全ての旧蔵者印が切り取られているわけではないため、この作業も徹底して行われたわけではないようである。

また、印Bは豊津の藩校「育徳館」の印と一緒に押されていることもあり、小笠原家の蔵書が藩校に寄贈されたのだらうと思われる。「育徳館」と「笠家文庫」印がともに押された本は城西大学水田記念図書館所蔵漢方古史料『傷寒論述義』(天保15年:1844年刊)、国文学研究資料館蔵『竹取物語』(正保3年刊)などの例がある。これらの本はいずれも美本ではなく、稀覯書というわけでもない。

印Bの押された本には、他にも以下のようなものがあった。

・国文研蔵『増鏡』(タ4-6-1~10)

「育徳館」印あり

・名古屋大学附属図書館(神宮皇學館文庫)蔵『絵本孫子童観抄』(皇399・2N)中村経年 慶応元年刊

・国立台湾大学図書館蔵『楠一生記』(455870~455811、B-25)

落月堂操扈、正徳六年刊

・法政大学能楽研究所古川文庫蔵『大蔵流十九番狂言本』(7)『大蔵流十二冊狂言本』(9)

目録には「笑家文庫」とある。書写は江戸後期~幕末か。比較的新しい本。

印Aが押されたものはいのちのたび博物館の所蔵資料の中では2点しか見つからなかった。ひとつは『和伝鷹経』であり、もう一つは『武家年中行事』である。『和伝鷹経』は二本松泰子の調査によって現在2種類の本が伝存していることが分かっているが、この本はその3つめの本と言える点で貴重である。鷹狩りの鷹についてその由緒由来を説くものであり、いのちのたび

博物館の本は見返しに金箔型押し紙を用いるなど豪華な装丁になっている。中の本文は中世末期から江戸初期にかけての書写と思われる、やや古風な書体である。上下二巻に分けているが、印は上巻の1丁表の右下にしか押されていない。印Aの押された他の本はみな各冊の1丁表右下に押している（東大東洋文化研究所蔵『杏花天十四回 鈔本』は中川忠英の旧蔵書を譲り受けたか買い取ったかしたものが見られ、右下に中川家印があったため右上に押印している）ので、この本も元は上下巻合わせて一冊だったものを二冊に分けたものと思われる。本の上下が化粧断ちされているので、その可能性は高い。それに対し、『武家年中行事』は装丁も藍色無地の紙表紙による簡素なもので、豪華本ではない。どういう基準で印が押されたのかについては分からないことが多かった。

印Aについては、他にも以下のようなものがある。

- ・筑波大学附属図書館蔵『謡本 二十七番』（ル255-74）観世身愛写、慶長八年～十一年
- ・東大大学院人文社会系研究科・文学部図書室蔵『狂言台本』 現物未確認
- ・韓国国立中央図書館蔵『離謡鼓覚集大成』（古5-56-25）宝永二年刊
能・狂言関係のコレクションが存在したと思われる
- ・国文研蔵『神璽考』西田直養著、
国学の本。西田直養は小倉藩士で国学者。この本が直筆かどうかは不明
- ・不二文庫旧蔵『浜松中納言物語』正親町三条実助写、四条隆術写。「宝玲文庫」印有り
正親町三条実助は正二位権大納言に至り、寛永十年七月に四十六歳で没。『浜松中納言』の諸本の中では古い時代の書写にあたる。小松茂美『校本 浜松中納言物語』（二玄社 一九六四年）の底本として採用
現在は所在不明
- ・龍門文庫蔵『発句帳』（7の4）四巻四冊、寛永年間刊 現物未確認
- ・国会図書館蔵『きさらき紀行』（863-179）傘露著、安永四年刊
- ・国会図書館蔵『江戸の幸』（わ911・3-16）恵方窟秀国編、安永三年刊
- ・早大図書館蔵『さくら合』
俳諧や軽めの読み物のコレクションがあったか
- ・東大東洋文化研究所蔵『杏花天十四回 鈔本』
白話小説か。見返しに書き入れあり。「中川小卯も同じ / 中川忠英旧儲 / 小笠原家売立に出たもの」
- ・名古屋市蓬左文庫蔵『經典釈文』（杉1-141）唐・陸徳明撰、康熙年中刊
画像で確認。現物未確認
- ・天理大学図書館蔵『中説』（H128・9/23）文政十年刊
昌平坂学問所の印あり
現物未確認
- ・一誠堂『六臣註文選』慶安五年刊、佐野治左衛門版
画像で確認。現物未確認
漢籍のコレクションもあったか

印Aの押された本は市場に流出したものが多く、いわゆる貴重書・稀覯書の類いであると思われる。また、藩主の著作である小笠原忠雄の私家集『老木拙筆集』（内閣文庫蔵）には小笠原家の印はなかった。印Aには底辺に目立つ2箇所欠けがあるが、国文研蔵の『神璽考』の印のみ底辺に欠けが見られない。『神璽考』は小倉藩士で国学者であった西田直養（寛政5年：1793～慶応元年：1865）の著作であり、文久元年（1861）の写本が確認できるので、成立はそれ以前と考えられる。この本が直養の直筆であるかどうかは不明なのだが、彼が小倉藩士であったことを考えれば、完成からそう遅くない時期に藩主に献上したことが考えられる。この本に押された印の状態が他の本に比べてよいとなると、江戸後期から末期の藩主である忠徴（1843～1856）忠嘉（1856～1860）忠幹（1860～1865）あたりの時代になってから、蔵書印で手元の本を管理することが始められたのかもしれない。当初想定していたよりも、かなり遅い時期になって蔵書印の使用が始まったと考えられる。それ以前に藩主の手を離れた蔵書については印が押されていない可能性が高く、現在残されている「笠家文庫」印のある本は全て近代になってから流出したものと言えそうである。

また、小笠原家の蔵書の傾向についても分かったことを述べておく。小笠原家の蔵書は現在では家系由緒に関するもの、武家故実や礼法に関するものの二つに大別できるが、武家故実や礼法に関しては、藩士たちも協力して資料を集めていたらしい。蔵書の中には「平井」や「犬甘」などの藩士と思われる印があるものも見られた。あまり摺りの良くない『本朝軍器考』の端本などもあったので、かなり手広く資料を収集していたらしい。ただ、他藩の大名文庫にはだいたどこにでも所蔵のある類題と歌集などの基本的な歌書類は見当たらなかった。初代と二代目の藩主は和歌・連歌に堪能だったので、蔵書があってもおかしくはないのだが、現在残っていない。文学に関するものは藩校の蔵書であったものを除けばほぼ残されていないが、領内の名所を漢詩と和歌で詠んだ『大谷記』（作者不明だが、二代目藩主小笠原忠雄ではないかと思われる）など、

わずかに残されたものもある。書かれた時代は不明ながら、小笠原家の道具類について記した「書院飾付諸道具書上」(いのちのたび博物館蔵)には、「居間書院の違棚」の項に「古今和歌集下冷泉持為卿筆 外題近衛信尹公」、「小書院の附床」の項に「八代和歌集 一軸 為家卿筆」が見え、『寛政重修諸家譜』には、忠真から忠雄への代替わりに際して将軍に献上の品の中に「冷泉為家筆の古今集」、「二条為氏筆の古今集」を献上したことが確認できるので、相応の歌書のコレクションがあったものと思われるのだが、それがどのような経緯をたどって散佚したのかは分からなかった。藩主の私家集『老木拙萼集』も、小倉藩には写しも残っていなかった。『老木拙萼集』は2本あることが知られているが、京都女子大学図書館谷山文庫蔵本が本文も跋文も全て同じ筆跡であり、内閣文庫本の朱筆による訂正箇所が直った状態で書写されているのに対し、内閣文庫の本は、朱筆の書き入れや訂正が随所に見られ、跋文は明らかに別筆(飛鳥井雅豊の筆と思われる)なので、こちらが原本と見てよいだろう。内閣文庫本には「二木氏」の印が見えるが、これは小笠原家の藩士の家である。歌集は藩士の二木氏に下賜され、その後流出したものか。判読できないが「 軒蔵書」の印があるので、二木氏の手を離れ個人の蔵書となった後、「和学講談所」印があることから、和学講談所の蔵書となったと思われる。他にも「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」の印があることから、和学講談所の蔵書となった後、書籍館、浅草文庫を経て内閣文庫蔵書となったものと思われる。谷山文庫蔵本には「芋芋苑文庫」(田中夢外)と「西莊文庫」(小津桂窓)の印があり、国学者が所蔵していたことが分かる。

以上のように、小倉藩は武家故実や礼法を家の学問としていたため、かなり特殊な蔵書構成になっているが、かつては他の大名家と同様に和歌や能・狂言、漢籍などの多用なコレクションがあったであろうことが判明した。しかし、こうした書物がなぜ小倉藩から失われてしまったのかについては解明できなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------